

# 山形大学附属博物館報 7

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1980 7. 1

## 目 次

今年の博物館——実習・展示・公開講演——	(1)
附属施設としての大学演習林	(1)
浮島の怪	(2)
偶感 (1)博物館実習のこと (2)訪問ミス——アテネの碑文博物館のこと	(3)
資料紹介——相良人形	(4)
お知らせ	(5)

## 今年の博物館

—実習・展示・公開講演—

館長 川 副 武 胤

今年度から博物館法第5条に基づく、学芸員となる資格が本学で取得できるように、人文・教育・理の各学部において博物館学その他の必要な講義と博物館実習即ち各学部の相当実習に併せて、当博物館においては博物館実習(一)(実務実習)とその他の実習(博物館実習(二))計2単位を開設した。この受講希望者が予想を大きく上廻ったため、現在その対策に大わらわである。

博物館実習(二)については県立博物館、県文化課をはじめ、県内の諸博物館その他関係方面の御援助をお願いすることになるが、いずれにしても本学附属博物館の有用性と、それに対する期待の大きさに、いまさらながら責任の重さを痛感する。

次に秋季の特別展示は、今年はそのテーマとして「雪と生活」を予定している。昨年の「木の文化」展同様、農学部・工学部・理学部・教育学部・教養部で関連研究部門を担当して居られる諸教官の御尽力に俟つところが大きい。本学の置かれている雪国という地域性との関係が深いので、関連研究の成果も大きく、また当然学内外の関心も深いと思われる。こうして郷土博物館時代の“郷土性”の限定を超えて自由にテーマを選択できるようになった結果、農・工・理学をはじめ、人文・生活科学・医学等、大学のもつ多面性・普遍性を広く取り込むことができるようになったが、この面での活動もすでに定着しつつあるように察せられる。来年以降の展示についても、引き続き、その方向での検討を開始している。

また昨年は農学部の北村昌美教授と私とで特別展にちなむ公開公演を行ったが、今年は展示期間中、講師の数を倍加し、農・工・教養及び医学部の教官をお願いする予定である。来年は引続きこの面の飛躍を期している。これは大学の教育活動の一環でもあり、また博物館設置

目的の一つである社会教育活動という使命に応えることになろう。

近年大学の開放—研究成果の社会への還元・公開—ということがいわれ、その面の機能の充実が課題となっているが、この課題に対して、大学にとり、また地域社会にとって、博物館が有用であることを証明するのは当面の任務である。正規の専任職員ゼロという館の負担は大きいが、それでもできる限りの努力をしたい。各方面の御理解と御助力を切願する次第である。

## 附属施設としての大学演習林

安 江 保 民

博物館の行事として、昨年催された“木の文化展”は森林、樹木を通して、演習林とかかわり深いことから、農学部林学科と共に、その準備のために幾らかのお手伝いを行った。この文化展が成功裏に終わったことは誠に同慶とするところである。一方、演習林が恒例として行っている山開きの行事には川副博物館長も参加されて、山の神に関する興味深いお話しをお聞きするなど、接触する機会が重ったことから本報へ寄稿するいきさつとなった。

本学の博物館に収蔵されている人文科学部門並びに自然科学部門の多数の資料と標本は、学生の教育や研究のための資料として活用されて行く役割を持っていると同様に、演習林も亦、同じような使命を担って設置されている。異なっている点は、収蔵品に相応するすべては自然科学部門に限られていることと、動物、植物、鉱物など、そこにある標本類のすべてが自然と共に生きつき、動的である点である。また林地を木材生産の場とする林業が、教育や研究のためにそこで営まれている点である。

本学の演習林は湯殿山に近い朝日村上名川に位置し、冬期2~4mの豪雪に覆われる。この厳しい気象条件は、

そこに生活する生物にとって、耐え難いもののように思われ勝ちであるが、雪による保温効果もあって、演習林の生物種は極めて豊かである。個体数は膨大なものであるため、数え上げることはまず不可能であるけれども、生物種のリストは整備して、学生や教官の利用の便に供さなければならないものと考えている。植物については森 邦彦先生によって調査が行われており、430余種の分布があげられている。このリストは、樹木学実習のよき参考資料として、学生に利用されているが、植物以外の鳥獣類や昆虫類については部分的な調査データのみで不十分な状態である。早急に調査整備しなければならない課題である。

この演習林は、長い日本列島の中のごく一部の地域であって、ここに適応し得る植物種並びに造林対象樹種は当然のこと乍ら限られてしまう。日本全体の林業・林学の観点からすると、教育上不充分と言わざるを得ない。しかし反面、地域性豊かな教育と研究がなされることも事実であり、ここに本学演習林の特色が生まれる。

附属施設としての演習林は、教育・研究上必要な林分、林地、標本、材料等を備えていなければならない。本学演習林753ヘクタールのうち約20%にはスギが植栽されており、植栽当年のものから伐期齢のものまで、ほぼ連続的に揃っている。また、スギ以外にも針葉樹と広葉樹の数種ずつが小面積ながら植栽されていて、各種目的に利用されている。残り80%の林地はブナ、ミズナラを主体とする急峻な広葉樹林で、この中に幾つもの小渓流が入り込んで、複雑な地形を構成し、雪崩発生<sup>ニ</sup>の常習地も介在するなど、各種目的に利用し得る林分が存在する。

われわれの役割は、効果的に利用し得る各種材料を整備し、教育効果を高めることにあるが、同時に、それらを使用し易い状態に持って行き、有効に活用されることを計らねばならない。どんなに貴重な材料を備えていても、それらの活用がなされなければ、まさにお蔵入りであって、その価値は失われてしまう。長年の努力によって林道網の整備が進められ、研究林分もようやく身近なものになりつつあるが、この努力はまだまだ当分続けなければならない。また、老朽化した実習施設の整備も緊急の課題として取り組んでいる。

山形大学が所有する土地面積は、全国の大学のうちで、10位ぐらいに位置していると聞く。これは演習林の広い面積によるところが大きい。この広大な自然の中で、教官と学生が寝食を共にしながら行う教育や研究によって、知識、技術の修得以外にも多くの効果を期待することができる。農学部以外の学部でも、研究やゼミなどのために、演習林の教育・研究に支障をきたさない範囲で、広く利用していただくことを望んでいる。

(農学部附属演習林長)

## 浮島の怪

斎藤 員郎

西村山郡朝日町といえば、山形県でも有数の山間部である。その大谷小学校大沼分校に、新卒早々のM君が赴任して2年目になる。館報の原稿を依頼されて困惑していた折しも、仲間との談笑の序に、M君の任地に近い“浮島大沼”に話談が及んだ。

私がこの沼のことを知ったのは学生時代であった。その時は、湿原の植生を調べていて、「山形県下に湿原性の植生をもった多数の浮島が浮遊する沼がある」と言うことでしかなかった。浮島は別に珍しいものでもないのとくに気に止めてもいなかった。本学に着任後も現地を訪れる機会のないまま久しかったが、たまたま、昭和51年、山形県でこの沼を調べることになり、私もそれに加わって、一諸に調べた方々からいろいろ教えを戴いた。

何よりも認識を新たにしたのは、ともかく、この浮島大沼は古くから有名なのだ。沼のほとりに浮島大明神なる神社がある。沼と浮島が神様であった。なんでも、鎌倉時代までは朝日岳信仰の修験道の宗教集落として栄え、その後も出羽三山詣りのついでにここを訪れる人は絶えないとか。現在でも、島が浮くことから海難守護神として、宮城県や福島県の漁民や船員がわざわざ参詣すると云う。古くは最上義光や徳川家光の名がこの沼と縁をもっているし、江戸時代初期には橋南<sup>ニ</sup>の「東遊記」にも誌されている。

南北200m、東西50m、水深3mばかり、沼とも池ともいえよう。これほどまでに有名であれば、勿論無冠無称ではない。昔の官位はともかくとして、日下部四郎太博士(東北帝大教授・物理学)や中野治房博士(東京帝大教授・植物学)らの科学的調査もあって、大正14年には国の名勝に指定されている。

中野氏は、湿原植生などの研究で先駆的な業績を残した人であるが、天然の湿原池塘の浮島成因についての考察は有名である。また、日下部氏はいわゆる信仰物理現象に興味を持ち、多くの神秘的現象を科学的に解明されている。

中野氏の論文(植物学雑誌, 33巻, 389-391, 1919)には「曾テ日本六十余州ニ擬シテ、各国ニ相当スル名ヲ有セシガ現今大小ヲ合スル時ハ百余個ニ上ルト云フ。然レドモ直径二米及至上ノモノハ二十余個ニ過ギズ」とある。また、大正15年この地を訪れた三好博士(東京帝大教授・植物学)はその報文(天然記念物及名勝調査報告・植物之部 7輯 46-50, 1927)に「去ル大正13年調査ノ際ハ浮島ハ皆池岸ニ停留シ、一モ浮動スルモノナカリシガ、今回ハ幸ニ運動ノ状ヲ目撃セリ」と記して風によって浮島が移動した様子を詳述したのち、「浮島ノ固有ノ運動ハスカル風力ニヨル運動トハ全く別ニシテ。

却ッテ風ナキ時ニ起ルヲ常トス」と断定している。すなわち、往時は大小多数の浮島が、風もないのに浮動していたのである。少なくとも、江戸時代初期から大正年間に至るまで、とにかく多数の島が固有の浮遊運動を持続していたのだから神技というほかない。ちなみに、日下部氏の論文の標題は“On mysterious motion of the floating islands in Yamagata” (Sci. Rep. Tohoku Univ. Ser. I. 3, 43~64, 1914) である。

ごく常識的に云えば、浮島の本体は比重の小さい泥炭や植物の根などきわめて粗い組織からなっている。これらとて長い年月の間には水を充満したり、分解したりして、いずれは水没してしまう。島の代替わりがなければ、多数の島が永続しない筈である。私は、この4年程の間に数回この地を訪れているが、径1m内外の島が数ヶ、池岸に接して微動だにしないのを見ているにすぎない。どうやら、最近では島の再生産は神様をしても難儀とみえる。それとも、信心をもたない者には浮島の運動はみえないのであろうか。M君も初めは見えなかったようだ。しかし、村の古老と親しく交るうちに、六十余州が動いたと云う。誠に有難い神様である。

以前は4月6日に「芝祭り」という祭礼があったそうだ。今では毎年7月の第3日曜日に「島祭り」が催されると聞く。格式の高い神社である。沼は集落背後の小高い丘の上の小盆状のところにある。二次林ではあるが、目通り1mを越すアカマツやコナラの社叢がよく保存されている。岸辺の一部には、マコモやヨシの低層湿原が発達している。

どうやら、六十余州永続の秘密は、この祭礼と湿原にあるらしい。そして、風なき時に起こるを常とする浮島固有の運動は、沼をとりまく地形と無関係ではないらしい。

45戸の集落が、奥深い山間の南向き緩斜面に、ひっそりと息づいている。児童数14名、教員3名の“山の分校”は集落の中心にある。周辺の山林は山菜の宝庫である。湖岸には休み茶屋（時代が変わって「湖畔の家」という）もある。信心浅からぬ諸氏の心眼には、必ずや、名勝の名を恣にする六十余州が去来するだろう。

(教養部助教授・博物館運営委員会委員)

## 偶 感

宍 戸 直

### (1) 博物館実習のこと

「博物館（美術館）に勤められないものか」と学生諸君から質問を受けた事がある。つまり学芸員になれないかという問である。それに対しては、いつも「難しいよ」と答えてきた。それは、わが国に博物館そのものが極めて少く、館員も限られていたからである。また、専門の研究職である国立の博物館員の事が頭に浮んだからでもある。しかし、各地方自治体等が公共施設の充実に力を

注ぐようになってくると、博物館の数も次第に増え、学芸員の需要も増し、法律に定められた資格の取得も要求されるようになった。その資格取得の隘路となっているのは博物館実習である。

昨年九月、本学の博物館運営委員会の席上、本学の学生のために実習をして頂けぬものかと質問をしたのは、他大学の学生が実習をしているのを会議出席の直前に目撃し、かつての希望者の弁が私の耳によみがえったためである。

今年度から、学芸員となる資格を得る条件が小白川キャンパスの三学部で一応整えられた。ところが、いざ希望者が揃ってみると、約200名に近い人数である。これには川副館長以下、この衝に当たって来た人々もびっくりさせられた。この人数を収容し得る教室は三学部にはない。そればかりか、肝心の実習も数班に分けて何度も開かなければならない。附属博物館にとっては思いがけぬ大事となった。附属博物館をもつ大学は稀有である。この貴重な存在が学生の教育機関として、大きく、あらたな一步を踏み出す事は大学自体にとっても発展であり、喜ばしい事だと思う。願わくば、学生諸君がそれぞれの専攻分野を生かして、学芸員として進出し活躍されん事を。

### (2) 訪問ミス

#### —— アテネの碑文博物館のこと

ウィーンからアテネに向う機上で、これからのギリシアとの出会いを思うと、いやが上にも胸は高なつた。北部ギリシア、空軍の基地でもあるテサロニケは厚い雲で覆われていたが、オリュンポス山から天下るかのように南下すると、アテネ上空は完全に雲が切れていた。この変化、多様さに一つのコスモスを感じない訳にはいかなかった。あれはリュカベトス、あれがアクロポリスだと心の中で叫びながら窓から見ると、機はアテネを左に見ながら洋上に出て、大きく左に旋回して南から空港に入るのであった。真青な海の上に真白な航跡を引いて走る船が見える。あれはアイギーナの島（アファイア神殿がある）に違いない等と考えながら、ただただ、これからの至福の日々を思った。

Yalouris 館長からの招請状をポケットに入れ、悪名高きシンタグマ広場の近くの宿を出て、アテネの国立考古美術館に向う。入口で聞くと、館の右側の道路沿いに管理局の門があるから、そちらへ回って欲しいという。足どりも軽い。美術館と道路を距てて工芸学校や美術学校がある。壁にはスローガンが大きく、吹きつけ塗料で書いてある。この辺はイタリアと同じだな等と思った時、入口があった。人がいたので案内を乞い、件の「招請状」を渡すと、やがて奥まった部屋に案内された。割に小さい部屋だが、五〇歳台位と思われる小太りの小柄な女性が若い女性に何か指示している。ヨーロッパでは女性の館員、研究者が多い。だが、あの著名な Yalouris 館長で

ない事は確かである。部長位の人かなとも思った。やがて用事が終わると私の方に向き直り、そこで初めて挨拶をかわすこととなった。話をしているうちに、「ここをお訪ねになったのか?」、「ここにお出でになったのか?」という意外な質問である。「まさに、しかり」。「……………」。「……………」等と問答しているうちに、この館は予定していた訪問先ではなく、書物では知っていた、かの碑文博物館であることが判明した。考古美術館と同一の建物で、その一割を占めてはいるが全く別の博物館である。何しろ喜び勇んでいたし、教えられた通りに入口があったから、私は頭から考古美術館の入口と思いこんだのである。びっくり仰天、まさに晴天の霹靂であった。失礼を詫びると一同大笑いとなった。気難しそうに見えた女性館長も一挙に親しめる存在に変わった。

館長の御指示による案内人付きでアテネ国立考古美術館には、無事辿りついた。そこで応待してくれた古代部門の部長、P.G. Calligar氏から、Yalouris館長は文化庁長官となっておられる事が知らされた。ギリシアの文化庁長官は大変な地位である。言うまでもなくギリシアでは文化財の占める位置は誠に高い。国の存立がかかっていると言っても言い過ぎではない。その最高の長である。考古美術館での丁重な扱いはYalouris氏の手紙のお蔭に違いないし、碑文博物館長の当初の堅い表情は、手紙を書いた人物の重みのせいではないかと思った。

碑文博物館は小ぢんまりした館ではあるが、そこに収められている碑は、ギリシア史研究上不可欠のドキュメントである。石片を集めて修復し、その碑文を再構成する忍耐の要る地道な仕事は、例えば、パルテノン神殿の建立の経過と時期確定にも光明を当てている。

この訪問ミスは私の忘れ得ぬ思い出である。訪問ミスで、その時館長のお名を伺わずにしまった。この館長のお名前を知ったのも、また館長令嬢がミュンヘンで勉強した美術史研究者である事を知ったのも、私が帰国してしばらく経ってのこと。本学に出張講義に来られた先輩の松島道也氏にこの顛末を話した折のことである。ギリシアを想うと、館長室でみんなで笑った日の事が、ギリシアとの出会いの〈戦慄〉と共に鮮かによみがえるのである。

(人文学部教授・博物館運営委員会委員)

## 資料紹介

### 相良人形

中 沢 勝 磨

当館に収集・展示されている人形資料を、材料によって分けると、①木を材料にしたもの、②土を材料にしたもの、③紙を材料にしたものの三種類になり、さらに、これらを製作地別に分類すると下記のようなになる。

①木を材料としたもの

a こけし b 笹野彫り

②土を材料としたもの

a 相良人形 b 酒田瓦人形 c 鶴岡瓦人形

③紙を材料としたもの

a 山形姉様人形 b 鶴岡姉様人形 c 三春紙人形  
d 鴻巣人形

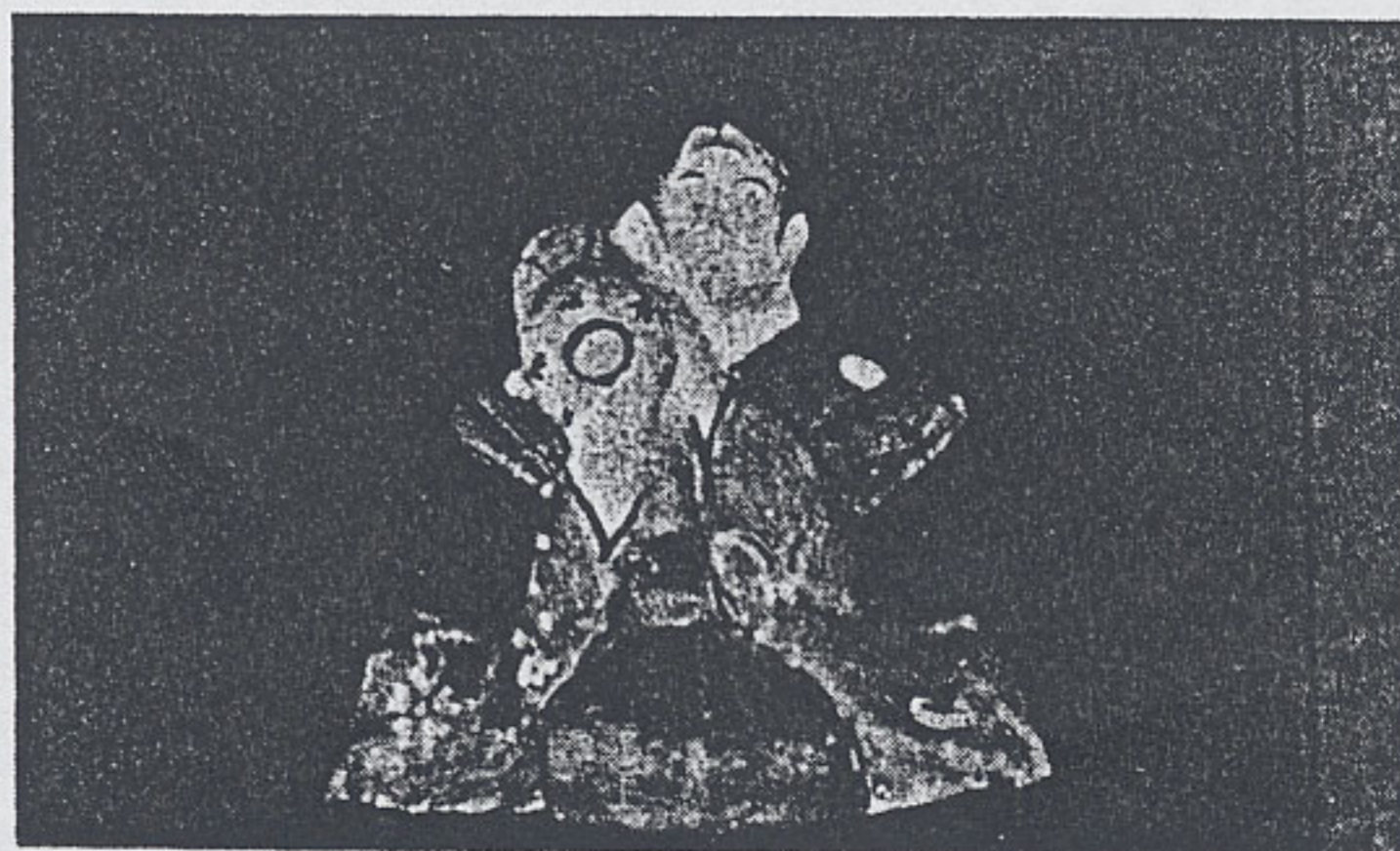
以上以外の材料で作られた、わら人形、陶製人形、セルロイド人形、金属人形等は本館には収集されていない。

人形は、人間の姿に似せて作られた愛玩物で、その起りは古く、はじめは呪術的意味か、信仰の対象として作られたとする見方があるが、時代の進展とともにその意味も変化し、現代では、子供の愛玩用(玩具の一種)となり、さらには大人の観賞用(美術工芸品)となっているものもあり、多面的な性格をもつようになった。そしてその製作技法や材料なども、時代や地域により多種多様を極めて、素朴で郷土色豊かな作品が全国で作り出されるようになった。

これらのうち米沢市で製作されている「相良人形」について簡単な解説を試みたい。

相良人形は、粘土をこねて作るいわゆる土人形で、製法は土をこね、型に入れて人形を作り素焼にした後、胡粉を塗り彩色して仕上げるもので、製作が比較的容易で安価な上、量産できる利点があるため、江戸時代から明治・大正時代にかけては、町家だけでなく農村地帯にまで盛んに広まった。今日、製作が途絶えた江戸時代の土人形が農村の旧家などに残っていて発見されることがあるのは、このためである。

相良人形という名は、米沢市の相良家で代々製作していたのでこの名が付けられたもので、その起りは、江戸後期(18世紀後半)に米沢藩主上杉鷹山が、領内に産業を奨励するための一つの政策として、藩士で当時御膳部頭をしていた相良清左門厚忠に命じ、陶器の先進地である相馬に派遣して、製陶技術を学ばせ、成島に窯を築き陶器を焼かせた。これが成島焼の始めであるが、厚忠は成島焼の生産指導・監督をするかたわら、技能に長けていた人であったため、趣味で土人形を作って、これを知人や上司らに贈り、やがて三月の節句などに飾られるまでに至った。



古相良 鼓打ち

武士の作ったものとあって、はじめは「相良さま人形」とか「花沢人形」といわれていたが、明治の中頃から今の名で呼ばれるようになった。

作品は、京都の伏見人形の技法を取り入れた形跡が見られ、彩色には土地の名産である植物染料の紅を用いたりして独特のものを創っていた。以後、相良家は代々この業を伝え、文化・文政年間（1804～1830）の最盛期には数百種の型があって、内職として家計をうるおす程であった。

人形作りは、相良家では代々婦女子の手仕事で、毎年11月から翌年3月末日までが作業期間とされ、主人は人形の目つけだけ行った。その後時代の影響を受けて型も彩色も変化し、現在「古相良」と言われる型は200種位伝わっている。これを米沢市内の雑貨店などで店売りしたほか、近在各地へ行商が売り歩いた。

ところが、太平洋戦争時代になると、燃料・材料の入手難などのために、200年近い伝統を持った人形作りも一時途絶えるに至った。然るに、これを惜しむ家族・縁者・愛好家等の間で、復興運動が起ったのに励まされて再び世に出る機会を与えたのは、6代目 清氏（昭和41年、62才で死亡）の長男で、米沢工業高校建築科を卒業し、二級建築士の資格もある建設会社サラリーマンだった相良隆氏が、42年に一転して人形作りの道にはいり、7代目を継ぐことになってからである。建築士から転業した隆氏は、母の“志げ”さんや愛好家、玩具研究者たちから要領を教えてもらったり、仙台の堤人形師 芳賀佐五郎さんをたずね、泊まり込みで作り方を学んだ。粘土が柔らかすぎれば型がくずれ、堅ければヒビがはいる。マユ毛や口元一つの書き方で、顔の表情がまるっきり違ってもくる。つくってはこわし、つくってはこわす日が続いたが、たゆまぬ努力と研究の結果、隆氏は新しい作り方を確立した。粘土は昔ながらの自宅裏の花沢の白粘土だが、キネでたたいて柔らかくしていた昔と違い、今は小石やゴミが混じらないように水を溶いてこし、適当な堅さにする。カマは自動的に800度になる電気ガマを使い、塗料も化学製品を使っている。しかし、衣装のサクラやキクの花模様と結髪などは、古相良の伝統を忠実に守っている。

相良家に伝わる人形の原型は200余種類あるが、隆氏は、これまで150種位復元に成功している。彩色もすでに、古相良に劣らない程の腕前になっている。伏見人形や堤人形など、産地の名で呼ばれている土人形が多い中で、この人形は作者の姓がつけられていることが珍しいと言われているが、最も大きな特徴は、武士（人形作りとしてはズブの素人）の手づくりから始まったものだけに“素朴さ”“ユーモア”の中に気品があふれていることだと評されている。隆氏は「やっとコツをつかんだ。顔などの描彩も伝統の味が出せるようになった」と語っている。また「人形を殺すも生かすも工人の腕次第。愛され

る人形づくりに魅力を感じる」とも話している。隆氏は、もはや迷いのない立派な後継者となり、人形作りに生きがいを見出し、その製作に励んでいる。

現在、本館に展示している相良人形は18点あり、のうち古相良と言われるもの4点、新しいもの14点となっている。

代表的なものに、三番叟・牛乗り童子・獅子持ち童子・天神・子守・内裏・官女・立美人・角力・犬などがある。

#### 参考文献

1. 西沢笛畝 日本郷土玩具事典
2. 山形新聞記事



古相良 天神

## お知らせ

### 1. 特別展「雪と生活」について

本館では、55年度の特別展のテーマを「雪と生活」と決め、目下具体的な計画を検討中である。

一、期 日 昭和55年11月上旬～中旬の予定

二、会 場 博物館展示室及び中央図書館会議室

三、展示目的 東北地方の日本海側は、わが国屈指の多雪地帯で、特に山間部の積雪は、2～3m時には5～6mを越すことも珍らしくない。そして根雪の期間は、120日も続くことがある。このため雪国の人々は、直接・間接雪の影響を受け、生活を制約されながらもこれを利用すると共に、雪との闘いを続けてきた。

然るに、最近における防災科学技術の進歩は“克雪”と“雪の特性を生かす道”を探る傾向が強まってきた。そして、このことに対する人々の期待もまた大きくなってきている。

今回の展示では、積雪地での雪に順応した生活の実態と雪との闘いの歴史、さらには、科学で挑む“克雪”と“雪の特性を生かす道”がどこまで研究され、われわれの生活と関わっているかを理解させようとするものである。

四、展示構想 ——展示内容のおおよそ——

(1)雪の気候学的研究

- A. 降雪・乾き雪（灰雪・粉雪・綿雪・玉雪）
- B. 積雪の物理的性質（締り雪・濡れ雪—餅雪・粗目雪・凍雪—堅雪）
- C. 雪庇・樹氷・霧氷

(2)雪害とその対策

- A. 積雪の重量（家屋倒壊・森林果樹の倒伏・折損）
- B. 電線着雪（電線切断）
- C. 豪雪（除雪作業・雪おろしと雪掘り作業・交通途絶）
- D. 雪崩
- E. 融雪洪水

(3)雪国の衣・食・住

- A. 雪国の住宅（中門造・多層民家・雪囲い・防雪林）
- B. 雪国の暖房（いろり・こたつ・あんか・火鉢）
- C. 冬期間の越冬食品と食糧貯蔵法（干し物・塩漬・野菜の雪中・土中又は地下室貯蔵）
- D. 雪国の衣服（綿入れ・じゅばん・足袋・手袋・かぶりもの・襟巻・角巻）
- E. 雪国の履物（雪靴・藁靴・かんじき）

(4)積雪と雪国の産業経済

- A. 雪国の農業（稲作栽培・野菜栽培—ハウス栽培・果樹栽培・家畜飼育・林業経営）
- B. 雪が育んだ地場産業（織物業・和紙・漆器・藁細工等）

(5)雪国の民俗行事と遊び

- （火祭・ナマハゲ・カマクラ雪祭り・雪合戦・そり・スケート・スキー）

(6)克雪と雪の特性を生かす道

- A. これからの積雪地の住宅建築
- B. 寒冷地住宅の保温設備
- C. 除雪・融雪対策（除雪機械・道路、鉄道の防雪設備・融雪装置—消雪パイプ・流水溝・電熱融雪）
- D. 雪エネルギー利用の問題
- E. 地下道・地下街・地下鉄建設の問題

以上のようなテーマによる資料を展示するとともに、理・工・農各学部の関係教官による公開講演も予定されており、本学各学部の「雪と生活」に関連した種々の研究成果が、公開される場となるであろう。

2. 「学芸員資格取得のための講座」の新設に伴う「博物館実習について」

当館はすでに、昭和27年4月文部省より「博物館相当施設」の指定をうけ、学内の共同研究施設として本学の研究と教育に利用され、多くの業績をあげてきたが、本学では「博物館法」に定める「学芸員」の資格を取得させるために必要な授業科目が、開講されていなかったため、当館におけるこれまでの「実習」は、むしろ他大学の「学芸員養成コース」履修生のため利用されていた。そこで、本学でも標記の授業科目を開講し、これと関連してその博物館実習を当館で実施するように、人文・教育・理の三学部と当館の協議の結果、今年度から当館は、「実務実習」（博物館実習(一)）その他の博物館実習（博物館実習(二)）を担当することになった。このことは、当館における機能の中で、教育の占めるそれが、これまで以上に拡大されてきたことを意味し、愈々責務の重大であることを痛感している。

本年度・実務実習希望者数（但し3年生は未確定）

人文学部			小計	教育学部			小計	理学部		小計	合計
3年	4年	聴講生		3年	4年	3年		4年			
25	14	1	40	27	8	35	13	22	35	110	

〈特別展〉木の文化展見学者数

（昭和54.11.6～11.16）

一般	個人	230 (人)
	団体	0
大学生	個人	363
	団体	15
児童	個人	1
	団体	64
合	個人	594
	団体	79
計	総数	673

山形大学附属博物館報 No.7  
1980.7.1 発行  
編集兼発行人 山形大学附属博物館  
(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12